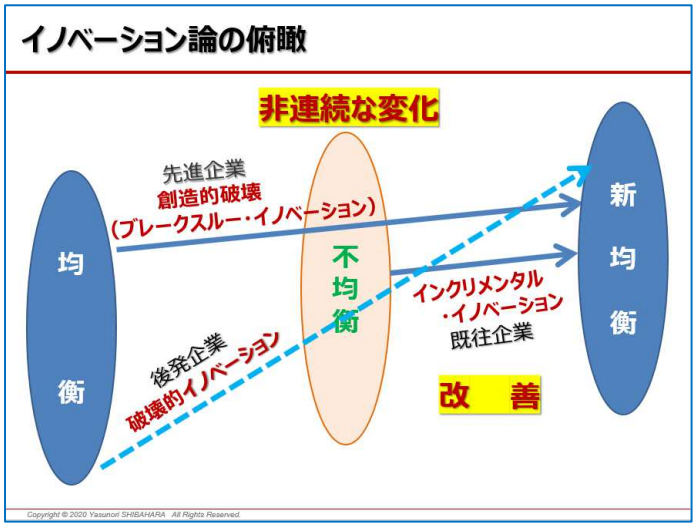
1.　コラム「論点提起」：イノベーションは誰が興すのか、何処で興るのか

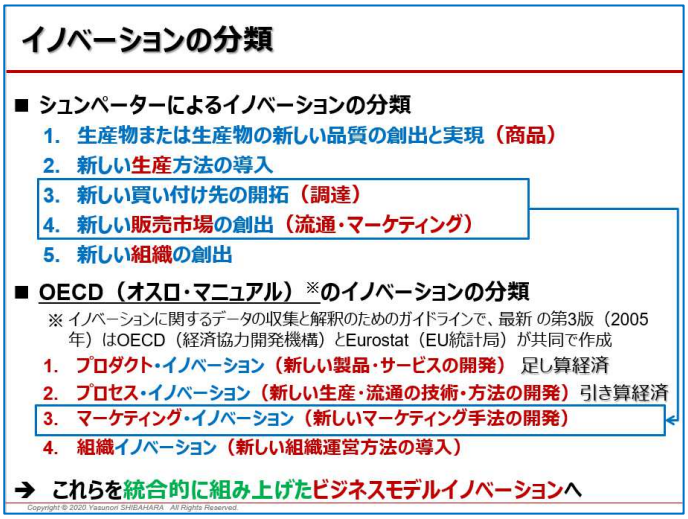
現在は、閉塞感・揺り戻し感が漂っている時代、ギャップが拡大している時代、そして歴史的な構造変革の渦中にあり、次の均衡に向けての踊り場にいる。この踊り場を突破する駆動力/推進力が「イノベーション」であり、その「イノベーション」の源泉が「知の創発・蓄積」で、さらにその源泉が（個人の）「アイデア」である。

イノベーションの本質は、従来なかった新しい商品［財・サービス］の市場評価を受けての供給を通じて、社会・経済の仕組み、人々の暮らし方、文化・価値観を非連続的に変える（創造的破壊）にあり、「改善・改良」、「発明」に留まるものとは異なる。



破壊的イノベーションは、後発企業による価格破壊を突破口とする市場破壊であり、それが拡大・進化することにより、ついには創造的破壊者をも凌駕し、先進企業へと変身を遂げる。
インクリメンタルイノベーションに留まることは淘汰されることを意味する。

日本は、戦後の「破壊的イノベーション」から、成長後の「ブレークスルー・イノベーション（創造的破壊）」に移行できなかったことが失われた30年を招来した原因の一つである。



つまり、イノベーションの源泉は「個人」にあり、「組織」ではない。そして、新たな均衡をめざすモチベーションが起きやすい場所（例えば、課題先進地の地方）でこそ、イノベーションが興る。イノベーションの芽を、事業として興し、企業を興し、そして「産業」にまで高め「イノベーション」たらしめるのは組織力、社会の仕組みである。地方発リバースイノベーションによる「地方創生」（Local Value Creation）が追求する本質の一つがここにある。

［参考］「イノベーションは小さなグループから起こる」　グーグル創業者ラリー・ペイジの名言5選、2020/03/29 22:45　https://forbesjapan.com/articles/detail/33237